

中国における日本語からモンゴル語に 翻訳された書物についての一考察

周 硯 舒*

A Research on the Mongolian Translation of Japanese Books in China

ZHOU Yanshu

This study investigates the publication of Japanese books translated into Mongolian in China and the translations from Japanese into Mongolian in other countries since 1949. Japanese works translated into Mongolian in China are mainly read by the Mongolian people living there. Before 1980, few Japanese works were translated into Mongolian, which grew in numbers after China's Reform and Opening-up. The most translated works among them were Japanese literature and Japanese works on Mongolian studies. Most were translated from Cyrillic Mongolian in Mongolia to the traditional Mongolian used by the Mongolian people in China, or translated from Chinese to Mongolian, with very few directly translated from Japanese to Mongolian, due to the lack of translators using both Mongolian and Japanese at that time. Besides, some of the Mongolian translations of foreign works were translated into Mongolian through Japanese, indicating more Mongolian translators were proficient in Japanese. This paper sheds light on the characteristics, problems and trends of Mongolian translation of Japanese books in China in recent years by sorting out the Mongolian translation of Japanese literary works and Japanese works on Mongolian studies, and through the publication and translation of Marco Polo's Travels translated into Mongolian from multiple languages.

キーワード：中国, 日本文学, モンゴル研究著書, モンゴル語訳, 重訳

Key Words : China, Japanese Literature, works on Mongolian studies, Mongolian translation, Indirect Translation

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

はじめに

中華人民共和国成立の 1949 年から今日までの中国における外国著作のモンゴル語訳について調査する際、意外な事実が判明した。原著が大体媒介語を通してモンゴル語に重訳されている。中国語訳から重訳されたものと、キリルモンゴル語から翻字されたもののがかなり大きな割合を占めている。媒介語としては、中国語、モンゴル語のほかに、ロシア語、英語なども挙げられるが、日本語の事例も少なくはない。そして、日本の著作をモンゴル語に翻訳する場合、よく直接翻訳した、ということがある。中国でどのような日本の著書がモンゴル語に翻訳されたのか、そして、どのような外国著作が日本語を経由してモンゴル語に翻訳されたのかは、本研究の問題意識である。本研究は、1949 年から今日までの中国におけるモンゴル語に翻訳された日本著書と日本語経由でモンゴル語に翻訳されたほかの国の著書の出版事情を調査対象として、ひとまず中国における日本著書のモンゴル語訳の全体像の把握を試みる。この作業によって、日本著書のモンゴル語訳における特徴がいくつか見えてくるに違いない。それから、この 70 数年間、特に改革開放以来の 40 年間、中国における日本文学作品、モンゴル研究書のモンゴル語訳、日本語経由で翻訳された最も面白い本『マルコ・ポーロ旅行記』の重訳事情などについて、若干の考察を加え、近年の中国における日本著書のモンゴル語訳の特徴、問題と動向の一側面を浮き彫りにしたい。

今まで中国におけるモンゴル語翻訳の先行研究は中国の包玲玲氏の「新時期中外文学作品蒙訳研究」(2016 年)、林春艶氏の「新中国成立後十七年の中外文学作品蒙訳研究」(2016 年)、薩如拉氏の「内モンゴル地区蒙訳図書出版研究」(2018 年)などが挙げられるが、視点がほぼ中国、モンゴル、ソ連、ロシア、欧米のモンゴル語訳書に絞り、日本の著書についてはあまり触れていない。本稿はまず総合的に中国毎年の出版物情報を記録する『全国新書目』、モンゴル語出版物事情を記録する『中国モンゴル文図書総録(1987～1997)』、各出版社のモンゴル語出版物目録『内モンゴル人民出版社モンゴル語図書目録(1951～2009)』、『世界文学訳叢 40 年(1979～2019)』を利用して、1949～2022 年までの出版されている日本語からモンゴル語に翻訳・重訳した訳書の書誌情報を集め、その全貌を提示してみたい。そして、当当図書販売サイト、京東図書販売サイトなどの図書販売サイト、孔夫子古本販売サイトに登録している各種訳書の書誌情報や、一部分の翻訳者、出版社編集者に対する聞き取り調査などを通じて、中国における日本文学作品とモンゴル研究書のモンゴル語訳、日本語経由で翻訳された『マルコ・ポーロ旅行記』の重訳事情の詳しい情報を収集した。これらの調査、分析に基づき、中国における日本語からモンゴル

語に翻訳・重訳した訳書の特徴、面白い経緯、存在する問題など明らかにしたい。

1. 中国でモンゴル語になった日本文学作品

各種『蒙古文図書目録』から見れば、今まで出版されているモンゴル語書物は大体20種類に分類し、整理されていることがわかった。マルクス・レーニン主義・社会主義理論思想、哲学、社会科学、政治と法律、軍事、経済、文化と教育、言語、文学、芸術、歴史、自然科学、理科、天文と地理、生物と環境、医学、農畜産物、工業建築、交通、辞書類などである。外国著書に対するモンゴル語訳書はまた大きく社会主義理論思想、民族歴史文化、世界文学(児童文学)、経済、農牧畜などの5種に分けることができる。この5種類の中で、マルクス・レーニン主義・社会主義理論思想の訳書を除き、約8割が外国文学作品の訳書である。

中華人民共和国建国以来、中国における外国著書に対する翻訳は2つの時期に分けられる。第一期は1949～1978年、第二期は1978～現在までの改革開放40年間とされている。1950年代から1960年代にかけては、外国著作のモンゴル語訳は数が多かったが、種類が比較的単純で狭く、半分ぐらいがマルクス・レーニン主義・毛沢東思想で、半分ぐらいが外国文学作品という状態である。外国文学作品の中では、ソ連、ロシア、欧米の作品は圧倒的多数を占め、日本文学作品はこの時期ほぼゼロである。その理由は、当時の政治イデオロギーの影響を除けば、モンゴル人翻訳者は少なく、ほとんどソ連、ロシア、欧米文学の翻訳に集中しており、日本文学には注目していないようだ。翻訳された小説は大体『戦争と平和』『静かなドン』『鉄はいかに鍛へられるか』のような革命、社会主義建設をテーマにしたもので、アメリカ作家ウェルキムスの『鉄青馬』のような草原題材作品、アンデルセンの童話などもある。「文化大革命」(1966～1976年)の間に、外国文学の翻訳は「停滞状態」に陥った。1976年、文化大革命がようやく幕を閉じ、1978年、改革開放の政策が実行されたので、中国では外国文学の翻訳も盛んになった。中国における日本文学のモンゴル語訳は、おおざっぱに言えばこの時期に発足し、改革開放以後の1980年代に入ってからようやく軌道に乗るといった経緯をたどってきた。

1980～1990年代、各種外国文学作品選、叢書の中国語訳書が盛んに出版された。このブームに巻きこまれ、外国作品のモンゴル語訳も一連の作品選、叢書が出された。『外国短編小説選』(内モンゴル教育出版社、1979年)、『外国短編小説選編』(内モンゴル人民出版社、1981年)、『外国児童短編小説』(内モンゴル人民出版社、1982年)、『外国文学作品提要(2冊)』(内モンゴル文化出版社、1983年)、『外国文学作品提要(1上下、2上下、3上下)』(内蒙古教育出版社、1989年)、『外国優秀短編小説選』(内モンゴル文化出版社、

1993年),『世界經典文学 ノーベル文学賞受賞小説集』(内モンゴル人民出版社,2017年),『世界文学短編小説選集 上中下3冊』(内モンゴル人民出版社,2020年)など大いに出版された。1979年『世界文学訳叢』という文芸雑誌も創刊,最初は季刊,後は双月刊となり,2022年現在まで,すでに219号も出している。この雑誌は外国文学をモンゴル語に翻訳する主な陣地になっている。

この『世界文学訳叢』の第2号(1980年3月)に載せられた小林多喜二の短篇『母たち』は中国で一番最初にモンゴル語に翻訳出版された日本小説であるだろう。モンゴル国での最初の日本文学作品は徳永直らの短篇を集めた『赤旗の下で』(1956年)だと言われているが,プロレタリア文学から出発するのはモンゴル,内モンゴルにおける日本文学輸入の共通点だと言えるだろう。『世界文学訳叢』今までの219号のうち,約50号が日本文学作品を翻訳紹介した。ジャンルが小説,散文,詩(俳句),童話に及び,作家が30人近くに達した。井上靖,森村誠一,星新一,芥川龍之介,安部公房,三島由紀夫,川端康成,大江健三郎,太宰治,志賀直哉,国木田独歩,小島信夫,村上春樹,金原瞳,川上弘美,安房直子,松尾芭蕉らの作品は載せられている。『世界文学訳叢』は文芸雑誌だから,幅の制限があって,短篇のほうが多かった。これは『世界文学訳叢』に限る問題ではなく,中国における日本文学のモンゴル訳にある全般的な問題であると言える。中編,長編の場合,分けて2号か3号に連載するのは普通である。だから,モンゴル国で翻訳出版された夏目漱石の『三四郎』,司馬遼太郎の『最後の将軍』,『草原の記』などの長編小説は中国ではモンゴル語に翻訳されていないのである。翻訳されていないといっても,中国語,モンゴル語双語教育を受けているモンゴル人にとっては,興味があれば,これらの作品の中国語訳を読むこともできる。これも日本文学のモンゴル語訳がそれほど豊富ではな



図1 膨大の数の『世界文学訳叢』(2011~2020刊)

い一つの原因になっている。

以上のように、日本の文学作品は作品選、叢書の1篇として出版されたことが多いが、単行本として出版されたのが比較的稀である。モンゴル題材の井上靖の『蒼き狼』（『ボルテ・チノ』民族出版社、1987年）は単行本として最初に翻訳出版された小説である。あと挙げられるのは芥川龍之介の『「鼻」——日本当代小説選訳』（内モンゴル人民出版社、2009年）、三島由紀夫の『金閣寺』（内モンゴル文化出版社、2012年）、推理小説西村京太郎の『怖ろしい夜』（内モンゴル人民出版社、2012年）、宮沢賢治の『よだかの星』（『夜鷹之星』、内モンゴル教育出版社、2014年）、『銀河鉄道の夜』（内モンゴル人民出版社、2017年）ぐらいだろう。『「鼻」——日本当代小説選訳』はタイトルが「鼻」だが、中は芥川龍之介、星新一、川端康成、眉村卓、大沢在昌、森瑤子、柳美里らの作品であり、本当の単行本とは言えないだろう。『銀河鉄道の夜』は世界経典文学シリーズの1冊として出版されたのである。このシリーズは全9冊で、日本文学はこの1冊しかなかった。これはキリルモンゴル語訳本から翻字したもので、中には『注文の多い料理店』、『狼森と笹森、盗森』、『水仙月の四日』、『ざしき童子のはなし』、『さるのこしかけ』、『檜ノ木大学生の野宿』、『祭の晩』、『オツベルと象』、『グスコブドリの伝記』、『銀河鉄道の夜』など10編収録されている。調査によると、児童文学は割りと多くの特集、単行本を持っていることがわかった。

児童文学は、最近アンデルセンも含め、世界の主な児童文学が中国でモンゴル語で読めるようになってきた。中国における日本児童文学のモンゴル語翻訳は少し遅かったが、1980年代の末頃の中川李枝子『いやいやえん』（『不不園』、内モンゴル人民出版社、1987年）、松谷みよ子『日本の民話』（『日本民間伝説』、内モンゴル少年児童出版社、1989年）からであろう。松谷みよ子の作品はほかに、『ふたりのイーダ』（『兩個意達』、内モンゴル人民出版社、1991年）、『日本古代児童神話』（内モンゴル人民出版社、2001年）などがあ



図2 世界経典文学シリーズの1冊宮沢賢治『銀河鉄道の夜』



毛毛羌的故事



南瓜里的故事



龍子太郎

図3 『日本当代童話』シリーズ

る。これは日本語から直訳したもので、翻訳者は日本留学経験のある額斯爾門徳、薩仁其其格夫婦二人である。二人の日本児童文学翻訳作品はあと2002年に内モンゴル人民出版社によって出版された『日本当代童話——龍の子太郎』（所収は松谷みよ子、豊島与志雄の作品）、『日本当代童話——毛毛羌的故事』（所収は松谷みよ子、宮沢賢治の作品）、『日本当代童話——南瓜里的故事』（所収は松岡享子『ちいさなたいこ』、宮沢賢治『銀河鉄道の夜』と『グスコブドリの伝記』）が挙げられる。

児童文学と言えば、ほかに原子修の『月と太陽と子どもたち』（『月亮太陽和孩子们』内モンゴル人民出版社、2002年）も単行本として出版された。『世界文学訳叢』2018年の第192号と2019年の第200号は安房直子の童話を翻訳紹介した。これは安房直子童話シリーズ、計5冊の中国語訳（接力出版社、2012年）が出版されたことにつながっているかもしれない。それから、『世界文学訳叢』2021年の第210号は巖谷小波『日本お伽噺』も紹介したことがある。

以上をまとめてみると、中国における日本文学作品のモンゴル語訳の数は、ここ40年で大幅に増加しているが、中国語訳と比べれば、まだ貧弱といっても過言ではない。日本文学作品は数えきれないほど中国語に翻訳されているのに対して、モンゴル語訳の日本文学作品はその氷山の一角にすぎないと言えるだろう。日本語から直訳した作品も増えてきたが、中国語訳、キリルモンゴル語訳から重訳した作品も大きな割合を占めている。だから、やはり避けられない誤訳が存在している。例えば、中川李枝子の『いやいやえん』は中国語訳から重訳したものだが、作家の名前が中川孝枝子に間違えられた。漢字「李」と「孝」は一見、分かちにくいだろう。

今まで、40人近くの日本作家の作品が翻訳されている。よく翻訳されているのは名家名作だが、モンゴル族歴史文化題材、推理小説、SF小説も翻訳者、出版社側の注目を浴

びている。そして、母国語を失わないように、多くのモンゴル族の親は幼い頃から子供にモンゴル語の児童文学を読ませているため、さまざまな日本の児童文学作品もモンゴルに翻訳出版されているのも中国での日本文学のモンゴル語訳における一つの特徴だと見られるだろう。

2. モンゴル語になった日本モンゴル研究書

外国著作の中で、よくモンゴル語に翻訳されているのはモンゴル歴史文化に関する研究書である。最近、この種の本の翻訳出版（中国語訳も含む）ぶりから見ると、外国のモンゴル研究書は中国のモンゴル族の人たちにとって、もう自分の民族を理解、研究する一つの重要な窓口になっているといっても、あながち不当な位置づけではないだろう。

中国における外国モンゴル研究書に対するモンゴル語訳は1970年代の終わり頃から始まった。翻訳範囲はスウェーデン、モンゴル、フランス、日本、デンマーク、イタリア、イラン、ソ連、ドイツ、アメリカ、イギリス、インド、ロシア、ベルギーなど十数カ国に及んでいる。その中、モンゴル、日本、ソ連、ドイツ、ロシアなどの研究書は比較的多く翻訳されている。モンゴル研究の関連文献によると、モンゴル、ロシア、日本などの国におけるモンゴル研究の基礎が早期に形成されており、研究成果が多く、影響力を持っているのはその一因である。1990年代以前は、民族出版社（北京）、吉林人民出版社、黒竜江人民出版社などもモンゴル研究書のモンゴル語訳書の出版に参加していたが、1990年代以後は、大体内モンゴルの出版社に集中している。民間出版社もあるが、主としては内モンゴル人民出版社、内モンゴル文化出版社、内モンゴル教育出版社、内モンゴル大学出版社はこの種の本の出版事業を担当している。最も多く出版したのは内モンゴル人民出版社である。

不完全な統計によると、1978年から1989年までは13種、1990年から1999年までは24種、2000年から2022年までは、70種ぐらいの著書が出された。注目すべきなのは、言うまでもなく、この20年間のこの種の本の増加ぶりである。全般から見れば、一番多くモンゴル語に翻訳されている研究書はやはりモンゴル国の著書であるが、日本の研究書は第二位で、30種以上に達している。2014年、この種の本は出版ピークを迎え、年間17種も出版された。それは、2014年は内モンゴル人民出版社が「国外モンゴル学著作訳叢」という叢書を出版し始めた最初の年からである。このシリーズは100部を出す計画であるが、2022年までは計42部、45冊が出されている。42部の中には日本の研究書が一番多く、8部（表1を参照）を占めている。次はモンゴル7部、アメリカとドイツそれぞれ5部、ロシアとフランスそれぞれ3部、ソ連、イギリス、インドそれぞれ2部、スウェー

表 1 「国外モンゴル学著作訳叢」における日本の研究

原作名	著者	訳書名 (モンゴル語)	訳書名 (中国語)	訳者	訳書 刊年	備考
7 蒙古学問寺	長尾雅人	ᠮᠤᠩᠭᠤᠯᠤᠯᠤᠰᠤ ᠠᠨᠤᠨᠠᠭᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ	蒙古学問寺	敖特根巴雅 尔	2005年 1月 初版 2014年 12月 再版	
8 モンゴル草原の生 活世界	小長谷由紀	ᠮᠤᠩᠭᠤᠯᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ	蒙古草原的生 活世界	嘎・烏雲格 日勒, 色音	1999年 3月 初版 2014年 12月 再版 2020年 10月 再刷	
19 グビライの挑戦	杉山正明	ᠭᠦᠪᠢᠷᠠᠢ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ	忽必烈的挑战	赛音朝格图	2016年 6月 初版	中国語版あり (社会科学出版 社, 2015年)
25 蒙古風土記	米内山庸夫	ᠮᠤᠩᠭᠤᠯᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ	蒙古風土記	赛音烏拉其 图	2018年 5月 初版	
27 疾駆する草原の征 服者—遼西 金 元	杉山正明	ᠮᠤᠩᠭᠤᠯᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ	疾馳の草原征 服者：辽西夏 金元		2018年 5月 初版	中国語版あり (広西師範大学 出版社, 2010年)
28 論文集	和田清, 森川哲雄	ᠮᠤᠩᠭᠤᠯᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ	蒙古中央部落 察哈尔史料	索特諾穆卓 玛绰	2018年 1月	キリルモンゴル 語から翻字
36 アルタン・ハラー ツァイ (先駆者) : モンゴル近代文学研 究集成	岡田和行	ᠮᠤᠩᠭᠤᠯᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ	和平的歌者	額・普日布 扎, 策・朝 魯門	2019年 8月 初版	キリルモンゴル 語から翻字. 中 国語題名「和平 的歌者」は誤訳.
37 ゴビ砂漠の探険	多田文男	ᠮᠤᠩᠭᠤᠯᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠤᠯᠤᠰᠤ	戈壁探険記	保音巴特爾	2020年 7月 初版	

出所：内モンゴル人民出版社 2014-2022

ン、イタリア、スペイン、フィンランド、イランそれぞれ1部の順である。42部は全部新しく出されたものというわけではなく、2014年前にもう出版され、また再版再刷されたものもある。

内モンゴル人民出版社は1980年代からもうこの種の本の出版に着手し始めた。最初に出した叢書は「蒙古經典作品」(1980年)で、「国外モンゴル学著作訳叢」はこの延長に立っている。ほかに「蒙古文化小叢書」(1990～2016年, 計30部)も挙げられる。中に

は、日本人研究者小沢重男の『「蒙古秘史」の世界』（『「蒙古秘史」的世界』白音門徳訳、1998年）、木村理子『西から昇る陽』（『叢西辺昇起の太陽』白音門徳訳、2003年）などが収録されている。それに、「内蒙古歴史文化經典文庫」（2012年、計20部）を出したこともある。中には外国人の著書が3部しかないが、日本人研究者の著書が2部含まれている。それは、後藤富男の『モンゴル遊牧社会の研究』と和田清、森川哲雄の『蒙古中央部落察哈尔資料』である。後藤富男の『モンゴル遊牧社会の研究』は1986年にもう出版されたが、その後何度も再版再刷され、人気のあるモンゴル研究書として読者に認められている。『蒙古中央部落察哈尔資料』は、2つ以上の叢書に入れて出版されている。これこそが、中国におけるモンゴル研究叢書の特徴と目されるべきであろう。ほかに叢書に入れて出版されていない日本のモンゴル研究書は『日本モンゴル学研究史』（吉田順一著、包国慶訳、2007年）などもある。

それから、モンゴル文化出版社の出したこの種の本は佐口透の『蒙古帝国と西洋』（『蒙古帝国与西洋』博彦徳力格爾訳、2005年）、松本草平の『茫漠の曠野 ノモンハン』（『茫漠の曠野——諾門罕』賽音朝克図訳、2008年）、宮脇純子の『最後の遊牧帝国——ジュンガル部の興亡』（『最後の遊牧帝国——準格爾部の興亡』烏日根宝音ら訳、2013年）、田山茂の『清代に於ける蒙古の社会制度』（『清代蒙古社会制度』）などが挙げられる。

モンゴル語に翻訳されている日本蒙古研究書の一部は同時に中国語訳も持っている。田山茂の『清代に於ける蒙古の社会制度』はその中の代表的なものである。『清代に於ける蒙古の社会制度』の一番早い中国語訳は1987年商務印書館によって出版された潘世憲訳である。2014年、潘世憲訳はまた内モンゴル人民出版社によって改版され、『北方民族史訳叢』の1部として出版された。この叢書は中国語に翻訳された外国モンゴル研究書



商務印書館 1987年



内モンゴル人民出版社 2014年



内モンゴル人民出版社 2015年

図4 『清代に於ける蒙古の社会制度』中国語訳



図5 『清代に於ける蒙古の社会制度』モンゴル語訳（内モンゴル文化出版社）

で、計6部、7冊、6人の研究者に及んでいる。内訳は、ソ連2人、ロシア1人、ほかの3人が全員日本人研究者である。3人計4冊の著作はそれぞれ田山茂の『清代に於ける蒙古の社会制度』、和田清の『明代蒙古史論集』上・下2冊、愛宕松男の『契丹古代史研究』である。一方、宝音徳力格爾のモンゴル語訳は漢訳よりは少し遅かったが、1988年に内モンゴル文化出版社によって、翻訳出版され、2013年にまた再版された。モンゴル語に翻訳されている日本モンゴル研究書は大体中国語訳を持っているが、中国語に翻訳されている日本モンゴル研究書はかなり少数がモンゴル語に翻訳されている。

以上のような日本語から直接翻訳したモンゴル研究書のほかに、『マルコ・ポーロ旅行記』（青木一夫訳から）、『モンゴルの歴史と文化』（田中克彦訳から）、リヴァーの『トルゲート族』（辰巳篤夫訳から）、『モンゴル史 チンギス・ハーンとその後継者たち』（岡田英弘訳から）のように、原本の日本語訳から重訳したものもある。日本語から重訳の事情は次の章で言及するので、ここでは贅言しない。

以上見てきたように、1978年から2022年にかけて、計30種以上の日本モンゴル研究書が中国でモンゴル語に翻訳出版された。日本語から直訳したものもあれば、ほかの言語から重訳したものもある。重訳は大体中国語とキリルモンゴル文字から翻訳翻字したものである。日本のモンゴル研究書のほかに、日本語を経由してモンゴル語に重訳したほかの国のモンゴル研究書も見過ごすことができない。残念なことに、一部分の訳書には重訳ルートについて明確に表示していないので、一体どのぐらいの訳書が日本語を経由して重訳されているのかは判明できないが、その数は少なくはないということが明らかだろう。

中国でモンゴル語に翻訳されている日本モンゴル研究書の数はもちろん中国語訳の比喩物にならない。特にこの10年間、各種科研費の援助のもとで、外国モンゴル研究書は数えきれないほど数多く中国語に翻訳されている。調査によると、そのような本が、専門家

や研究者による勧め、翻訳者や翻字者による投稿などの方法を通じて、出版者の視野に入り、出版計画を立てるのは一般的である。出版の経費も、ほとんど政府出版援助、科研費などの補助金に頼るばかりであった。学術書の翻訳などは、補助金がなければ出版は難しいという事情があった。読者は大体研究者、高学歴読者を対象としているから、出版、発行部数は比較的限られているのも事実である。

3. 賛否両論の重訳

1949年から現在まで、第三言語による重訳は、外国の著作をモンゴル語に翻訳する主な手段であり、直接に原著から翻訳されたものは少ない。重訳(Indirect Translation or Relay)とは、直接に原著言語から翻訳するのではなく、第三言語を媒介とする翻訳を指す。外国著作のモンゴル語訳における重訳は、主に重訳と翻字の2つの方法を取っている。重訳は中国語または外国語の訳本を経由してモンゴル語に翻訳する方法であり、翻字はモンゴルのキリル文字を内モンゴルの伝統的なモンゴル語に書き換えることである。外国著作のモンゴル語訳本には、中国語訳からモンゴル語に重訳したものが最も多く、その次はモンゴルのキリル文字訳からモンゴル文字に翻字したものである。その合計は外国著作のモンゴル語訳の9割以上にも達した。もちろん、英語、ドイツ語、ロシア語訳からの重訳もあるが、日本語訳からの重訳は比較的多いようである。これも外国著作のモンゴル語訳に存在している顕著な特徴だと言えるだろう。

中国語訳から重訳した訳本が多いのは、中華人民共和国が成立して以来、翻訳事業を積極的に推進し、文化大革命までに、すでにソ連、モンゴル、ヨーロッパ諸国、アメリカなどの国の著書を数多く中国語に翻訳したからである。これも外国著作をモンゴル語に翻訳し始める契機となった。中華人民共和国が成立する前は、外国文学のモンゴル訳はほとんど空白という状態で、内モンゴルの読者は外国文学とは何か知らないぐらいといっても過言ではない。内モンゴルの読者が外国の文学作品に触れたのは、新中国の建国後からであるだろう。また、中国のモンゴル人には当時、外国語ができる人材が不足していたのも中国語訳から重訳した訳本が多いもう一つの原因と見られる。ただし、中国のモンゴル族の人たちはモンゴル語と中国語の双語教育を受けており、外国語から直接翻訳するより中国語訳から重訳するのがはるかに容易である。

なぜモンゴルの訳本から翻字したケースが多いのであろうか。モンゴルが1941年から採用したロシア語キリルアルファベット表記体系は内モンゴルのモンゴル人が使うモンゴル語と一見違うが、発音が概ね同じである。したがって、モンゴルのキリル文字からモンゴル語に翻字するのは、ほかの言語からモンゴル語に翻訳するよりも便利なのである。そ

して、モンゴルは1921年にソ連の支援で社会主義革命を果たした後、強いソ連の影響下に国造りを進めてきたので、ソ連は当時モンゴルの世界を認知する窓口となり、ソ連のものは中国よりモンゴルのほうにもっと急速に伝わった。例えば、1950～1980年代中国で最も人気のある教育的な作品『鉄はいかに鍛へられるか』の中国語訳は1961年に初めて出版されたのに対し、モンゴルのキリル文字から翻字したモンゴル語訳は2年前の1959年にもう内モンゴル自治区で出版されていた。

中国語訳、モンゴル語訳を底本に原著を翻訳するのはごく普通であるが、例外もある。即ち日本語訳からの重訳である。モンゴル語は日本語と同様膠着語に分類され、発音と文法体系も非常に似ているため、モンゴル族にとっては、比較的日本語を身につけやすいのである。また、満州国の時期、一部分のモンゴル知識人は日本語教育を受けたこともある。だから、日本の著作は大体モンゴル語に直訳できるし、日本語訳を底本にモンゴル語に重訳することも可能である。そして、内モンゴル自治区の赤峰、通遼などの地域で、今でも日本語は大学入試の外国語科目として設置されている。1980年代後半から1990年代初頭にかけて、留学ブームが始まった時、ほとんどのモンゴル族学生が日本を選んだ。これは、21世紀における日本語翻訳作品の増加の一因でもある。

日本語訳から重訳した著書は『マルコ・ポーロ旅行記』（『馬可波羅遊記』）、ドイツ人のモンゴル研究者ワルター・ハイシッヒの書いた『モンゴルの歴史と文化』¹⁾（『蒙古歴史と文化』内モンゴル文化出版社、1986年）、リヴァーの『トルグート族』²⁾（『土爾扈特人』内モンゴル文化出版社、1988年）、『モンゴル史 チンギス・ハーンとその後継者たち』（『成吉思漢与他的繼承者們』内モンゴル人民出版社、2014年）³⁾などが挙げられるが、その中で一番典型的なのは『マルコ・ポーロ旅行記』だと言えるだろう。

表2 『マルコ・ポーロ旅行記』のモンゴル語訳書誌情報

番号	訳者	モンゴル語 訳書名	中国語 訳書名	出版年月	出版社	備考
1	策・高 穆嘉普	ᠮᠠᠷᠠᠯᠠᠵᠢ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ	馬可波羅遊記	未詳 1942～1944年	特日共璦音出版社	ヘンリー・ユール英訳(1871年)を原本に、深澤正策和訳(1936年)、李季漢訳(1936年)も参考
				2004年12月	北京：民族出版社	
2	賽熙亜 樂	ᠮᠠᠷᠠᠯᠠᠵᠢ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ	馬可波羅遊記	1977年12月	吉林人民出版社	李季漢訳から重訳
				2001年9月	内モンゴル教育出版社	
				2014年12月	内モンゴル人民出版社	
3	葛爾樂 朝克圖	ᠮᠠᠷᠠᠯᠠᠵᠢ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠭᠢᠨ	馬可波羅遊記	1978年6月 (上・下2冊)	黑竜江人民出版社	青木一夫和訳から重訳
				2014年6月再版	内モンゴル文化出版社	
				2021年1月4刷		

『マルコ・ポーロ旅行記』は、今まで3つのモンゴル語訳本を持っている。いずれも重訳である。策・高穆嘉普訳はヘンリー・ユールの英訳(1871年)を底本に、深澤正策の和訳(1936年)、李季の漢訳(1936年)を参考にして翻訳したものである。賽熙亜楽訳は李季の漢訳から重訳したものである。そして、葛爾樂朝克図訳は青木一夫の日本語訳から重訳したものである(出版情報は表2を参照)。

策・高穆嘉普訳は『マルコ・ポーロ旅行記』の最初のモンゴル語訳本で、翻訳者の経歴から1942～1944年間に出版されたものだと推測できる。策・高穆嘉普(1912～1944年)は、本名其木徳・官布扎布、モンゴル族、内モンゴルのシリング盟正藍旗の獵師の家で生まれた。1922年、彼は生まれながら聡明で、北京雍和宮に所属する苗字が陳であるラマに選ばれ、雍和宮で修行し始めた。陳ラマは彼の中国語名を陳秉如と名付けた。策・高穆嘉普は雍和宮でモンゴル語、満州語、中国語、チベット語を習得し、また、外国人に仏経を書き写す機会を利用して、外国語も学ぶようになった。1932年、彼は燕京大学に入学し、モンゴル語、中国語、満州語、チベット語だけでなく、英語、日本語、ロシア語の3種の外国語を身につけた。1942年、策・高穆嘉普は日本東方外国語大学(現東京外国語大学)にモンゴル語教師として招聘された。そして、日本にいる間に、英語、中国語、日本語訳の3つの訳本を対照しながら、『マルコ・ポーロ旅行記』をモンゴル語に翻訳した。訳本の序文では、彼は『マルコ・ポーロ旅行記』を翻訳する当初の意図について言及した。「マルコ・ポーロの本が出版されて以来、いくつかの言語に翻訳されたが、ただモンゴル人の間では受け継がれていないのは悲しいことだと思う。私は、モンゴルの読者にこの本を読んでもらいたく、モンゴル文学にも貢献しようと思って、それをモンゴル語に翻訳することに決めた。」⁴⁾ 翻訳の過程で、策・高穆嘉普は「マルコ・ポーロはなぜ万里の長城に言及しなかったのか」、「モンゴル帝国高官録にはなぜマルコ・ポーロを含んでいないのか」、「マルコ・ポーロの旅行記に書いた天気の詳細は、地元の気候と相容れない。」

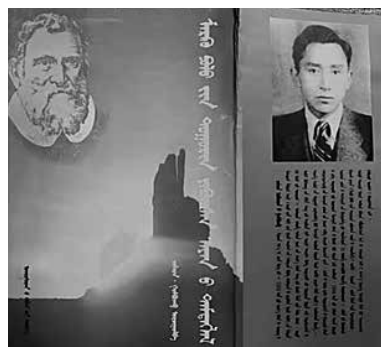


図6 策・高穆嘉普訳の表紙と表紙の裏面に印刷する訳者写真

などの疑問を呈し、マルコ・ポーロが中国に行ったことがない、単に地元の港で見たり聞いたりしたことを記録しただけであると推測した⁵⁾。

策・高穆嘉普は多国語ができる研究型翻訳者で、英訳、漢訳、和訳の三視点から対照しながら翻訳したので、訳本はもともと最も信頼できるバージョンになるかも知れない。しかし、激動な時代に出版され、本人の願ったとおりにモンゴル人に広く読まれることができなかった。2004年、彼の子供の努力によって、やっと再版が促された。

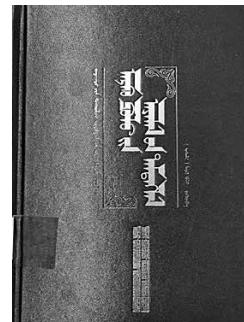
3つのバージョンの中で賽熙亜楽訳と葛爾樂朝克図訳は発行時期には多少の差があったろうが、ほぼ同時に出たものと思われる。二人とも内モンゴルの出身だが、彼らの訳書は最初は内モンゴルでなく、モンゴル族在住の吉林省、黒竜江省で出版され、また内モンゴルの出版社に再版、再刷されている。賽熙亜楽（1930～1993年）と葛爾樂朝克図（1925～1999年）は二人ともモンゴル族で、軍人出身である。賽熙亜楽は歴史学、言語学の研究領域において活躍し、『チンギス・ハーン史記』『チャハル概況』などの著作で名が知ら



1977年版

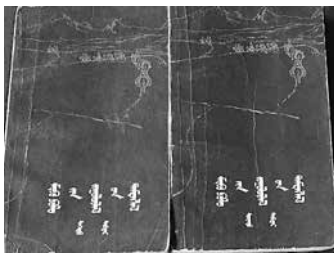


2001年版

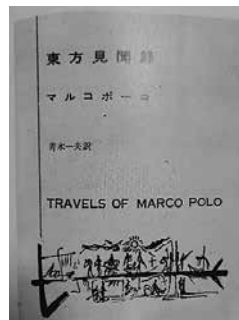


2014年版

図7 賽熙亜楽訳『マルコ・ポーロ旅行記』



1978年版



最初のページに青木一夫和訳の表紙を印刷している



2014年版

図8 葛爾樂朝克図訳『マルコ・ポーロ旅行記』

れている。葛爾樂朝克図は著名なモンゴル族作家で、『路』『雁之歌』などたくさんの名作を後世に残している。葛爾樂朝克図訳は現代モンゴル語を使っているから、読みやすいと若い読者たちに評価されている。一方、『マルコ・ポーロ旅行記』は今まで、魏易訳(1913年)、張星煥訳(1929年)、李季訳(1936年)、馮承鈞訳(1936年)、陳開俊訳(1981年)など5つの中国語訳がある。賽熙亜樂が底本にした李季訳は中華人民共和国建国後の最初の中国語訳で、底本の問題もあるが、誤訳が多いことがよく指摘されている。それゆえ、賽熙亜樂訳には誤訳があるのが免れられないが、古典的醍醐味を持って、一部分の読者に認められている。この2つの訳本はそれぞれの特徴で自分の市場を持っている。

以上のように、重訳は中国におけるモンゴル語訳にあるごく普通な現象だとわかった。翻訳は原文の「劣った複製」だと言われることがあるが、重訳は、そうした翻訳の「さらに劣った複製」として、直接翻訳より劣位のものともみなされる。重訳と翻字されたモンゴル語訳には、確かに誤解、訳漏れ、誤訳などの翻訳品質の問題がある。しかし、このような問題は直接翻訳にも発生する可能性があり、必ずしも重訳の本質的な欠点というわけではない。外国著作モンゴル語訳における重訳傾向は直接翻訳が難しいときに行われてきたものであり、その意義と役割を否定することはできない。世界はこうした重訳を通して中国のモンゴル人たちに伝わったのである。そのため、重訳は否定的側面だけでなく、異文化をモンゴル人に伝える上で有効な手段として評価すべきではなかろうか。

結 び

以上調査分析してきたように、中国における日本著書に対するモンゴル語訳は、1950～1960年代の間、ほぼ未開な状態で、改革開放政策以後の1980年代から始まり、ここ20年で増加ぶりを呈していることがわかった。特に日本文学作品、モンゴル研究書など翻訳され、モンゴル族の文学創作、モンゴル研究に影響を与えている。しかし、増加と言えば、やはり日本著書の中国語訳の数や範囲と比べものにならない。中国の第7回国勢調査によると、2021年まで、中国のモンゴル族総人口は630万人になっているそうである。その中、モンゴル語を話している人口は500万とされているが、文学作品、研究書などを読めるモンゴル族はやはり少ないだろう。日本著書のモンゴル語訳書だけでなく、ほかの国のものも利用する読者が少ないのは現状である。外国著書の翻訳出版が国や大学、科研費の援助によって進められているのは普通である。

面白いのは日本著書のモンゴル訳ルートである。原本から直訳する本もあれば、中国語訳から重訳、キリルモンゴル語から翻字するものもある。しかし、重訳の著書は相変わらず大きな比重を占めている。そして、日本語経由でほかの国の著書をモンゴル語に翻訳する

のもよくとっている方法である。前述したように、重訳は誤訳、訳漏れなどの問題が生じやすいが、直接翻訳が難しいときに行われてきたものであり、その意義と役割を否定することはできない。

注

- 1) 底本は田中克彦訳（岩波書店，1967）。
- 2) 底本は辰巳篤夫訳（生活社，1941）。
- 3) 底本は岡田英弘訳（学生社，1976）。
- 4) マルコ・ポーロ，策・高穆嘉普訳（2004）『マルコ・ポーロ旅行記』，北京：民族出版社，2頁。
- 5) 潘小平・武殿林ら（2012）『察哈爾史（チャハル史）』（中巻），内モンゴル人民出版社，911頁。

参考文献・資料

- 内モンゴル人民出版社（1992）『内モンゴル人民出版社モンゴル語図書目録（1951-1991）』。
- 内モンゴル人民出版社（2005）『世界文学名著』。
- 内モンゴル人民出版社社内資料（2009）『内モンゴル人民出版社モンゴル語図書目録（1951-2009）』。
- 内モンゴル人民出版社社内資料（2016）『内モンゴル人民出版社モンゴル語図書目録（2009-2016）』。
- 世界文学訳叢編集社（2020）『世界文学訳叢40年』。
- 謝天振・許鈞編集（2015）『新中国60年外国文学研究（第五巻） 外国文学訳介研究』北京大学出版社。